トン子とピー子は、何だか恥かしくなつて、細い〳〵尻尾をピク〳〵振りました。其れから毎日、トンとピー子は新しいお家で、綺麗な原つぱやお山を眺め乍らたのしく〳〵過しました。

選外佳作の十一

蛙と螢

岡本千枝子

綺麗な小川に、小さな水車が廻つて居りました。その水車の側に、ちつぽけな、草のお家がございました。その草のお家には、蛙さんと螢さんとが、仲よく住んで居ました。

いつも二人は、お夕食の御用意をする爲に、手提を持つて、市場に出掛けます。市場はズーツト川上の原つぱにございました。

今日も二人は、お買物に行くために、螢さんは蛙さんに、一生懸命青いリボンを結んでやりました。蛙さんは螢さんに青いお帽子を被せてやりました。そして、おそろひの、眞白いエプロンをかけて、手提を持つて、出掛けました。

いつものように川にそうて、お話しをしながら、小石の上を歩いて行きますと、メダカさんが川でお洗濯をしてゐました。

「今日は、隨分お精が出ますね。」

「おや、誰かと思つたら、蛙さんと螢さん、お買物ですか。」

「えゝ、市場まで御一緒に行きませんか。」

「有難うございます。でも今日は何もお買物がありませんから、又この次に誘つて下さいね。」

「あらさうですか、では又次に、サヨウナラ。」「サヨウナラ。」とメダカさんはお洗濯をしました。

又ジャブ〳〵と

まもなく市場に着きました。市場は、いつ來ても賑かです。お友達の、野ねずみさんにも、リスさん達にも逢ひました。蛙さんは、お藥賣りの蜂さんの處へ行つて、

「今日は蜂さん、お咽喉が少し疼いから、何かよいお藥り下さいな。」

「おや　いらつしやい。お咽喉が疼いですか、それは、お困りですね、そう〳〵とてもよく效くお藥がありますから、これを上げませうね。」

と言つて、甘い蜜の入つた貝を、手提に入れてくれました。

「有難うございました蛙さん。」

「有難うございました蜂さん。」と蛙さんは、お藥屋さんから出て來ました。

螢さんは、赤や黄や青色の蠟燭が美しく竝んで居る、蠟燭賣りのてんと蟲さんの處へいつて、

「今日はてんと蟲さん。蠟燭がなくなつたから、青いのを下さいな。」

「あらいらつしやい。蠟燭がなくなつたのですか、それはお困りですね、青いのですね。」と言つて、青い蠟燭を笹のはつぱに、包んで手提に入れてくれました。

「有難うございました螢さん。」

「有難うございました、てんと蟲さん。」と螢さんは、蠟燭屋さんから出て來ました。

「蛙さんもうお買物すみましたか。」

「えゝ、もうすみました、あなたは。」

「私もすみました。」と二人は又同じ路を急いで歸りました。そして、お夕食を食べて、螢さんは青い蠟燭に火をともして、水車の側の柳の上に据はり、蛙さんは蜜のおくすりを呑んで、水車の側の小石に腰掛け、足を水に浸しながら、お空を向いて、コロ〳〵〳〵と靜かに唱ひました。螢さんは、提灯をふつてお詞子をとりました。

お空のお星樣は、この音樂を聞きに毎夜、小川の側に寄つてまゐります。